

こぼれ話 23

祭りを彩る地口行灯

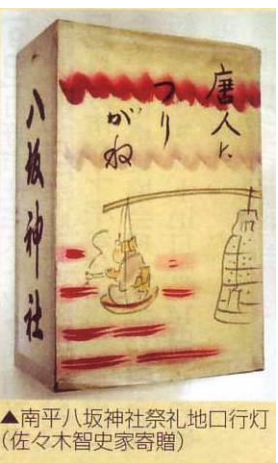
夏から秋にかけて、各地域で神社の祭礼が行われると、参道に飾られた地口行灯の明かりが祭りの夜を彩ります。

地口とは、ことわざや慣用句に、似た音を当てはめた、だじやれや語呂合わせなどのいわゆる言葉あそびです。それを文字や絵で表した行灯を「地口行灯」といいます。

たとえば、写真の「唐人につりがね」は「提灯に釣鐘（形は似ていても釣りの合わないことのとたとえ）」の言葉あそびです。ほかにも、「異国の旗も風次第（地獄の沙汰も金次第）」「や「新聞漢文でわからない（ちんぷんかんぷんでわからない）」といった、言い得て妙な、愉快な地口がたくさんあります。

日野の辺りでは「とうろう（灯笼）」と呼ぶこともあり、また、地口行灯とは別に、鳥居近くに提灯を連ねたものを「ちぐち」と呼んだりします。

最近では、祭礼で地口行灯を飾るところも少なくなり、新調せず古い行灯を大事に使っているところや、子供たちが描いたイラストを使うところもあるようです。これからも残しておきたい日野の祭りの風景です。



▲南平八坂神社祭礼地口行灯
(佐々木智史家寄贈)